



## 中国天津における租界の開発に関する研究：英租界を中心に

著者	劉 一辰
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7370号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00126090">http://hdl.handle.net/2241/00126090</a>

氏名（本籍）	劉 一辰
学位の種類	博 士（ 環境学 ）
学位記番号	博 甲 第 7370 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	生命環境科学研究科
学位論文題目	中国天津における租界の開発に関する研究：英租界を中心に

主査	筑波大学准教授	博士（農学）	村上 暁信
副査	筑波大学教授	博士（工学）	野中 勝利
副査	筑波大学准教授	博士（工学）	藤井 さやか
副査	筑波大学助教	博士（工学）	山本 幸子

## 論 文 の 要 旨

近代の中国都市では多くの租界が作られた。これらは中国が海外の国々と交流し、また対峙する場となったが、「植え付けられた都市」「国の中の国」と言われるように、地域社会に同化せず孤立した都市空間を構成したと評価されることが多い。

本論文は、中国で最大規模の租界空間が作られた天津、中でも最初期から開発され最大の面積へと成長した英租界を取り上げ、租界空間の①開発の意図、②開発の機能的性格、③地域社会との関係、の 3 点に着目しながら、租界の開発の特徴を解明しようとしたものである。

第 1 章では、研究の背景、研究の目的・方法・史料、先行研究、天津英租界の概要、等々について言及している。以下の第 2～4 章は、段階的に進められた英租界の開発時期に対応して、第 2 章：租界時代前期（1860～1897）、第 3 章：同中期（1897～1917）、第 4 章：同後期（1917～1943）の 3 つの時期区分に即して叙述されている。各章ではそれぞれの時期に開発された租界の①～③の特徴について述べると共に、第 3・4 章ではそれまでに開発された地区の当該期における変容についても言及している。

第 2 章では、最初に開発された原英租界を取り上げ、海河沿いに通された Bund（岸辺の通り）を正面とした街区開発が行われ、各敷地には商館・倉庫・住居がセットで建設されるという植民都市的設計が実施されたこと、租界内部では英国人が主体となった董事会により自治が行われていたことが述べられている。中国人による近代化運動である洋務運動も、その受け皿となる空間は英租界の周縁部に展開するに留まったのであり、全体としてこの時期の英租界は、英国人が主役の都市内都市であったことが示されている。

第 3 章では、まず英租界の内陸部側に新たに開発された拡充界について分析が加えられている。これによれば、開発は従前のスプロールに制約されて実施されていたものの公共空間は充実していたこと、ただしその公共空間は英国人のための空間としての性格が強かったことが指摘されている。そして、英租界・拡充界それぞれで別個に董事会が組織され自治が行われていたが、前期と同様中国人はほとんどその要職には就けなかったこと、一方で原英租界では商業施設が外国人により多く建設されていたのに対し、拡充界では中国人により住宅が多く建設され始めたことも解明されている。以上より、原英租界は英国人による地区としての性格を保持したものの、拡充界では中国人の関与が深まったとされている。

第4章では、最初に拡充界のさらに内陸部側に開設された推广界の開発実態が検討されている。機能的な近代都市設計が行われたこと、五大道という高質な住宅地が内部で確立され、これにより商業的な中心をなす原英租界と、郊外住宅地を持つ推广界という機能的な分離が英租界内部でもみられたことがまず明らかにされている。また、この時期には原英租界・拡充界・推广界で統一した董事会が結成されたこと、会の半数は中国人が就任可能となると共に中国人による商業施設の建設が原英租界でもみられるようになったこと、推广界では中国人・外国人双方が同様の割合で住宅を建設するようになったことなどが述べられている。以上よりこの時期に至って租界が近代的な都市の空間的特徴を具える場となるとともに、限界はあるものの中国人の関与が英租界全体で深まったことが示されている。

第5章では、第2～4章での個別の成果をまとめるとともに、租界が孤立した都市空間を構成したとの従来の評価は、英租界の場合、租界時代前期こそ妥当であるものの、中・後期には当てはまらず、むしろ段階的に地域社会と同化しながら定着していったと評価すべきであるとの結論が示されている。

## 審 査 の 要 旨

本研究は、これまで本格的な都市計画史・都市史学的検討が加えられてこなかった近代天津の英租界を取り上げ、その開発の特徴を丹念に解明した労作であり、次のような特徴を持っている。

- 1) 天津の英租界の開発について、都市計画の意図・機能的特徴といった、都市計画史研究におけるオーソドックスな検討項目に加え、地域社会との関係にも、自治組織・私的な開発主体という側面からアプローチして分析・考察を行った。
- 2) 「董事会報告」や英国国立公文書館所蔵の地図など、著者により初めて分析のために利用された史料が少なくない。
- 3) その結果、租界空間は中国の都市社会で孤立した性格を有していたという従来の一面的な評価を乗り越え、租界空間は段階的に中国社会に同化しながら定着したという新たな見解が示されている。

以上のように、研究方法・得られた知見の双方において新規性が認められる。

分析の対象としたのは英租界だけであり、他国によって開発された租界の分析や、それらの相互比較等が行われていないなど、引き続き検討すべき点が残されている。だが、全体として学術的な独創性、社会的な有用性を兼ね備えた水準の高い研究であり、学位論文として十分な内容をもつと判定する。

平成27年1月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（環境学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。